



Title	源氏物語版本の研究
Author(s)	清水, 婦久子
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44582
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 清 水 婦 久 子

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 18193 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 15 年 10 月 29 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学 位 論 文 名 源氏物語版本の研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 伊 井 春 樹

(副査)

教 授 後 藤 昭 雄 助 教 授 飯 倉 洋 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、源氏物語の近世初期に出版された版本の総合的な研究で、序章「総論」、第一章「版本『絵入源氏物語』諸本の研究」、第二章「版本『絵入源氏物語』の別冊付録」、第三章「源氏物語版本の本文」、第四章「版本『首書源氏物語』の出版と編者」、第五章「絵入り版本の挿絵」、第六章「『絵入源氏』で源氏物語を読む」からなり、巻末に「参考文献一覧」「図版一覧」「索引」等を収めており、400 字詰原稿用紙に換算すると、およそ 1200 枚近い大作である。

源氏物語の研究は、大きくは文献資料研究と作品研究とに分かれ、今日の研究者は後者が大半を占める状況にある。文献学的な研究に関心を持つ者は数が少なく、しかも多くは室町期以前を中心にし、江戸時代に出版された本文や関連資料はとかく二次的な意義しか持たないものとして等閑視してきたきらいがある。ただ、江戸時代を通じてもっとも普及し、読者を獲得してきたのは版本であるだけに、出版事情や諸版のこと、その本文の意義や挿絵などを考察することは、近世初期の読者層の実態を知るとともに、享受史の面からも重要である。

序章の第一節「源氏物語の版本」では、伝嵯峨本から元和本、無跋無刊記本、「絵入源氏物語」、版本の『万水一露』、『首書源氏物語』『湖月抄』の、それぞれの詳細な書誌、第二節「源氏物語の絵入り版本」では、絵入『源氏小鏡』『源氏綱目』『源氏鬘鏡』『十帖源氏』『おさな源氏』『源氏大和絵鑑』等について、その書誌とともに、版本としての意義を考察する。第一章は、第一節「慶安三年本の成立と出版」、第二節「万治版横本と無刊記小本の成立」についてそれぞれ詳細な検討を加え、従来承応三年版が慶安本「絵入源氏物語」の初版とされていたのを、無刊記本が初版であり、承応三年版は再版本であるとする。また、慶安本、万治本、無刊記小本など、すべて山本春正の手が加わっていたとする説に対して、詳細な検討によって、むしろ慶安本を模写した別人であったことを明らかにする。

第二章は、第一節「『源氏引歌』について」、第二節「『源氏目案』の成立」、第三節「版本付録の『源氏系図』」、第四節「版本『山路の露』」とからなり、「絵入源氏物語」の付録として付された四種の資料の成立、内容について検討する。第四章は、第一節「『首書源氏』の出版時期」、第二節「『首書源氏』の異文注記」、第三節「『首書源氏』の注釈と編集」、第四節「版本『首書源氏物語』の編者」と、『首書源氏物語』の成立から作者、内容に関する研究である。第五章は、第一節「近世初期絵入り版本の特色」、第二節「『絵入源氏』以後」、第三節「影印本『首書源氏物語 須磨』巻末付録より」からなり、挿絵の問題について、諸本との比較、その背景などについて論じる。第六章は、第一節「『絵入源氏』の挿絵と和歌表現」、第二節「物語の解釈と挿絵」、第三節「『絵入源氏』の本文

と注釈」とからなり、挿絵の表現と本文の関係を考察し、それぞれの絵の構図や解釈等の意義を述べていく。

論文審査の結果の要旨

本論文は源氏物語の近世版本に関してきわめて豊富な内容と新見に満ち、ほとんど研究されてこなかった分野だけに、今後源氏物語の研究史において貴重な意義を持つものと判断する。とりわけ、従来山本春正による慶安三年本「絵入源氏物語」は、承応三年の八尾版が初版であるとされてきたのを、再度原本の調査や版面の比較等によって、それを否定し、無刊記本が初版であったとする。これは大きな意義を持っており、研究者が無批判に旧来の説を認めてきたことへの警鐘ともなろう。また、その後に出版された万治版や無刊記小本についても、すべて山本春正の手によるとされていたのを、本文の詳細な調査により、別人による模写であることを明らかにするなど、さまざまな証跡によってこれらを明らかにしていく。また、「絵入源氏物語」に付された四種の資料について、すべて別人によるとしていたのを、「源氏物語引歌」は、本文の合点とすべて照合することによって、春正自身の作成であるなど、丹念な調査の成果を示す。『首書源氏物語』についても、その底本は『湖月抄』との関連を指摘されてはきたが、本文の比較によって万治本「絵入源氏」の本文を用いていることを明らかにする。また、『万水一露』の底本は無跋無刊記本を用いて作成していることなど、新事実を次々と解明し、源氏物語の研究史だけではなく、近世の版本書誌学にとっても貴重な成果となろう。

このように、従来ほとんど無視されてきた分野について、果敢にも基本的な調査を進め、膨大な量の資料を検討して得た成果は、重要な意味を持つものと思う。ただ、個々の注釈書の成立の判断や挿絵と本文の関係、当時の近世作品の挿絵との関係はまだ十全とはいえず、今後の課題であろう。ただ、それらを差し引いても、本論文は学界に裨益するところは大なるものがある。このような次第で、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。